第二十三回

香川の伝統的工芸品展

古くから海上交通の要衝として開けた香川県には、豊かな風土の中で育まれ、人々の手から手へと受け継がれてきた工芸品が数多くあります。これらは、天然の原材料を用い、昔ながらの技術・技法により作られているもので、今日でも生活の場で愛用され、人々に安らぎと潤いをもたらしています。

県では、これらの全国に誇りうる伝統ある工芸品を「香川県伝統的工芸品」として指定する制度を設け、現在37品目を指定し、その普及を図っています。

今回は、製作実演等を通して工芸士や工芸品と身近に接していただくとともに、高度な伝統技術による現代の生活空間にマッチした新しい作品も展示します。また、今回初めて、香川県漆器工業協同組合と香川県漆芸研究所との共同開発による漆作品の展示コーナーや、来場者の皆様が参加できる製作体験コーナーを特設します。

▼展示販売製作実演
▼新作展示
▼産学共同開発の漆器展示
香川県漆器工業協同組合と香川県漆芸研究所との
▼製作体験

香川の伝統的工芸品

※今回出展品目のみ

■香川漆器…香川県漆器工業協同組合・佐々木賛治
★経済産業大臣指定伝統工芸品(昭和51年2月26日指定)
江戸時代、高松藩主が茶道・書道に付随して漆器を奨励したのが讃岐の漆器づくりの始まりです。その後、香川漆器の始祖と言われる玉楮象谷が中国の漆技術を取り入れた幾多の技法を開発し、今日の基礎を築きました。その技法も蒟醤、存清、彫漆、象谷塗、後藤塗ほか多岐にわたり、製品も座卓・飾り棚などの室内調度品から、盆・花器・菓子器などの小物類まで広い範囲に及んでいます。

■欄間彫刻…香川県欄間彫刻組合・小比賀正
通風や採光のための欄間に、彫刻をほどこした欄間彫刻は、桃山時代から江戸時代中期にかけて、日本間の装飾として欠かせないものとなりました。松平頼重公をしたってきた飛騨の木工職人によって伝えられたと言われている讃岐の欄間彫刻も、次第に一般家庭に普及するようになりました。白木の美しい木目を利用して、こまやかな細工をほどこされた製品には、時代の風格さえ漂ってきます。

■組手障子…香川県ツアースリイウッド協同組合
日本建築の室内の間仕切りとしてなくてはならない障子は、鎌倉時代につくられたのが始まりです。その後、単なる実用としてのみでなく、格子に様々な装飾を加えること(組手加工)によって、書院障子、猫間障子をはじめ、今日でも広く利用され、障子を通したやわらかな光は、私たちにほのぼのとした安らぎを与えてくれます。

■肥松木工品…(有)クラフト・アリオカ
「肥松」は、樹齢数百年の老松の幹の部分で、脂分を多く含んでおり、気候風土の関係で、香川県では昔から良質のものが採れ、「肥松」を用いたろくろ仕上げの木工品は、江戸時代からつくられていました。じっくりと時間をかけて完成された製品は、彩色を施さない自然の木地のままの素朴な味わいと、年月を経るほどに出てくる赤茶色の艶の美しさが、独特の調和をかもしだしています。

■志度桐下駄…志度桐下駄製造組合
高松から東へ15キロ、さぬき市志度は全国に誇る桐下駄の産地です。町内には、原料となる荒取りされた桐材がうず高く積まれ、町の風物詩となっています。志度で桐下駄づくりがはじまったのは、明治40年。当時は、近隣の需要をまかなう程度のものでしたが、大正初期には生産量が急増し、今日の基礎を築きました。熟練した職人の手により、約40工程を経てつくられる桐下駄は、木肌のぬくもりをほのぼのと感じさせてくれます。

■讃岐一刀彫…青山憲成、上野 勲、山中象堂
天保8年、金毘羅大権現の旭社建立の折、全国から集まった宮大工によって始まったと伝えられる一刀彫の技法は、明治30年ごろ開校された琴平工業徒弟学校の彫刻科に伝承され、讃岐こんぴらさんの特産品・土産物として普及してきました。叩きノミの荒々しい刃痕を残しながら、細部に小ノミをきかせた、大胆にして細心なノミ使い。その巧みな彫りは、秀逸した職人芸を今に伝えています。

■長火鉢…(有)市原
長火鉢は、居間には欠かせない室内調度品のひとつでした。胴には、固くて丈夫な欅に光沢を出すために漆を塗るとともに、小物などを入れる引き出しには、鉄金具を取り付けたりします。この美しい木肌と重厚なつくりは、私たちの暮らしに潤いと安らぎを与えてくれます。

■菓子木型…(有)市原
和菓子づくりに欠かせない菓子木型は、江戸時代からつくられ始めたといわれており、香川県においても明治30年頃からつくられていました。材料は樹齢百年くらいの山桜を十分乾燥したものを用い、魚や花などの図柄を何種類ものノミ・彫刻刀で、左右・凹凸を逆に彫っていきます。完成した木型を二枚重ね、砂糖や餡(あん)などの材料を入れて抜き出すと様々な形の和菓子が出来上がります。決して表に出ない地味な存在の菓子木型ですが、私たちの目と舌を満足させてくれる和菓子づくりになくてはならないものです。

■讃岐提灯…(有)三好商店
讃岐提灯は、四国八十八ケ所の奉納提灯として発生しました。そのため、寺社特有の図柄や紋様が用いられ、極彩色に飾られた提灯が、今なお神社仏閣に飾られています。その技法は、「讃岐一本掛け」といわれる香川県独特のもので、一本の竹ひごを切らずに提灯をつくる香川県独特の技法です。中でも、三重構造の提灯づくりの技法は、一子相伝で継承されてきました。最近では、インテリア提灯や新しい技法でつくられた提灯が広く紹介され、明かりの彫刻として高い評価をうけています。

■一閑張…(株)民芸城山
一閑張の技法は、江戸時代の寛永年間に、明国より帰化した塗師・飛来一閑が創案したものといわれています。木や竹でつくった下地に和紙を張り重ね、日本古来の防水剤である柿渋を塗って仕上げます。和紙本来の粘りに柿渋が加わり、長年の使用に耐える強さが生まれます。製品はかごや皿などの器類から小物家具まで多彩で、本県特産のうちわにもこの技法が生かされています。

■丸亀うちわ…香川県うちわ協同組合連合会
★経済産業大臣指定伝統工芸品(平成9年5月14日指定)
丸亀のうちわづくりは、江戸寛永年間に金比羅宮参拝客への土産品として、金印入りの丸柄の渋うちわが売り出されたのに始まります。その後、平柄うちわが開発され、現在では、この平柄のものを主流に伝統的な竹製うちわがつくり続けられています。その用途も、涼用や炊事用など日常生活に密着したものの、装飾用や鑑賞用など様々なものがつくり出されています。

■竹一刀彫…(有)西村文男
わが国の竹彫技術は中国から伝来し、すでに奈良時代には盛んに行われていたようです。讃岐の竹彫は、香川漆器の始祖・玉楮象谷が確立した「讃岐彫」が起源といわれています。象谷一門など多くの人々が研究を重ね、木・竹・牙を素材に数多くの讃岐彫の作品がつくられました。竹彫は、煎茶が盛んな頃に茶合、練香筒などが数多くつくられていましたが、煎茶が下火になるとともに少なくなってきました。しかしながら、竹の持つ優しさと強さを活かして美しく仕上げられた竹一刀彫は、私たちの生活に安らぎと潤いを与えてくれます。

■古式畳…香川県古式畳協同組合・山下光一
畳は古代には座具として用いられ、薄手で、重ねたり折りたたむものをいいました。その後次第に厚みのあるものとなり、平安時代にはほぼ現在の形を整えるに至りました。こうしたなかで、公家や武家、寺社などにおいて格式空間を形づくるために、一定の定法にもとづく固有の畳が生み出されてきました。このような古式畳の製造技法は、京・大阪から讃岐の地にも伝えられ、現在も寺社や茶席などにおいて用いられています。

■岡本焼…(有)詫間土管製造所
三豊市豊中町の岡本地区では、近くで良質の粘土が採れることから、古くより農家の副業として素朴な焼物が焼かれていました。製品は俗に「ほうろく」といわれる土釜や鍋、豆炒り瓦など生活雑器が中心で、赤肌の暖かな焼き上がりは、明るい感覚にあふれ、人々の日々の暮らしの中で愛用されてきました。かつては、「ほうろく売り」と呼ばれた行商人が、製品を荷車に積み、雲辺寺山を越えて、遠く阿波まで売り歩いたといいます。

■讃岐装飾瓦…神内俊二
県内各地では、奈良、平安、鎌倉、室町時代の窯跡が数多く発掘されており、古くから瓦作りが盛んに行われていたことを物語っています。おそらく鬼瓦なども魔よけとしてかなり古くからつくられていたのではないでしょうか。その後、江戸後期に、瓦が民家の屋根にも普及してきますと、装飾瓦も多種多様のものが製造されるようになり、その技法が今日まで伝承されています。

■打出し銅器…大山柳太
銅は金属の中でも比較的軟らかく細工がしやすいことから、古くから金工の材料として用いられ、様々な生活用具に加工されてきました。打出しとは、型取りした銅板に熱を加えながら、木槌や金槌でたたいて目的の形に仕上げていきます。この技法でつくられた銅器は、地金がしまり丈夫で熱伝導率が高いため、鍋釜や湯沸かしなどに適しています。その飽きのこない落ち着いた色合いは、使い込めば使い込むほどに深い味わいが出てきます。

■保多織…(株)岩部保多織本舗
保多織は、高松藩主松平頼重公の命を受けた京都の織物師、北川伊兵衛常吉が創案した独特の組織を持つ絹織物で、松平家はこれを藩の織物として、明治維新に至るまでその技法を秘し、一般の使用を禁じてきました。保多織という名は、丈夫なことから、「多年を保つ」の意味で付けられたといわれ、独特の風合いを持つその製品は、香川県の代表的な織物として、多くの人に愛用されています。

■讃岐のり染…(有)大川原染色本舗
のり染は、もち米でつくった防染のためののりを、筒描きや型紙により紋様状に布地に置き、藍がめにつけたり、刷毛で引染めして染め上げるもので、県内各地で古くから行われてきました。とりわけ高松城下の瓦屋町には染屋が軒を連ね、着物やハッピ、ふとんなど生活に密着した様々な染物がつくられていました。その染色の技法は今に引き継がれ、伝統と新しい創造に根ざした染の素晴らしさをみせてくれます。

■讃岐獅子頭…(有)宮武嘉吉商店
神仏の祭礼に登場する獅子頭の発祥は、応神天皇のころに中国から渡来し、奈良朝前期の伎楽面に由来すると言われています。讃岐の獅子頭は、あご、耳、取っ手など二部を除いて張子の手法によりつくられています。粘土や木の型に和紙を張り合わせ、型抜きをした後、胡粉や漆で素地をつくり、様々な装飾を施して完成となります。乾漆つくりのため軽量で丈夫なところが大きな特色です。

■張子虎…真鍋佳則
張子虎は、中国の虎王崇拝がわが国に伝わり、つくり始められたといわれており、虎の武勇にちなんで、子どもの健やかな成長を祈る気持ちから、端午の節句や八朔祭の飾り物として、古くから愛用されてきました。ピンと張ったヒゲやゆらゆらと揺れる振子式の首などユーモラスなその姿は、郷土玩具や誕生祝、商売繁盛の縁起物としても喜ばれています。

■讃岐かがり手まり…讃岐かがり手まり保存会
手まりは、平安時代に中国より伝えられたといわれており、清少納言の枕草子にも遊び事としてでてきています。初め貴族の間で使われていたまりも、その後一般に普及し、わが国独特の美しい紋様が考案されて、今日でもその技法の伝承されたものが全国各地に見られます。観音寺地方におけるまりは、草木染めによる木綿糸を用いて、染糸一本一本を針でかがりながら20余種類の模様を描き出す技法に特徴があります。

※香川の伝統的工芸品に関するお問い合わせは、
香川県商工労働部経営支援課 まで
〒760-8570 香川県高松市番町4-1-10　TEL. 087-832-3342　FAX. 087-806-0211　e-Mail keiei@pref.kagawa.lg.jp
経営支援課ホームページ　http://www.pref.kagawa.jp/keiei/index.html